

Sherwood Anderson 再考の一視点

— “Death in the Woods” の評価をめぐって —

小 林 祐 二

I

アメリカの社会・文化と自然とのかかわりは深い。その分野に関するすぐれた研究もすでに数多くなされている。話を文学の分野に限っても同じことがいえる。アメリカ文学の中で自然の意味の変遷と発展をたどることは、そのままアメリカ文学史の主潮をたどることにもなり得る。たとえば、Emerson, Thoreau, Whitman などがそれぞれとらえた自然の意味の重なりやずれを考察して、その視点から、かれらの前後の時代に連なる詩人・作家たちが、かれらのとらえた自然の意味にどうひきつけられるか、あるいはどう反発するかを検討することは、アメリカ文学史におけるそれぞれの位置を見定めるための、ひとつの有効な方法である。Sherwood Anderson の評価が当面の問題であるが、その場合にもこの方法は多くの有効な討論をひき出せると予想される。

従来だれもが指摘するように、Anderson が一連の作品の中で追究したのは、十九世紀後半以来、とくにいちじるしくアメリカの生活全域を支配しつつそうとしていた産業主義・機械主義から、どうやって脱出するかという問題であった。その過程で、そのための活力を求めて彼はいつもアメリカ、特に中西部の自然に目を向け、その意味を問い、それを作品の中で描こうとした。そして彼は自然から得る *man*na ともいうべき活力を、しばしば *animalism*, *instinct*, *intuition*, あるいは *the primitive world* ということばを用いて語り、自分の内部に湧きおこるその力を *impulse* という語で表現した。そして、そのような自然と人間についての考え方をめぐっては、彼は早くから Whitman に対して親近感を抱き続けていた。また創作活動全体を通じて、彼は Whitman を意識していたともいえる。その意味での彼の Whitman 観については、すでに考察を試みたことがあるので、ここではこれ以上くり返さないが、いまこの小論では、その延長線にある問題として、はじめに述べた観点から、Anderson の “Death in the Woods” をとりあげて、自然についての彼の考え方が、どのように描かれているかについて照明をあててみたい¹⁾。

ここで “Death in the Woods” をとりあげるのは、単にこの作品が一般に評価が高いという理由からだけではない。あとでも触れるが、Anderson がしばしば言及するところによると、この作品が完成されるまでには、十年以上の歳月を経ているという²⁾。確かに完成にいたるまでの草稿は数多く残っているし、それらの比較検討も必要な仕事のひとつである³⁾。しかし、ここで重要なことは、先に述べた Anderson のいう *animalism* あるいは *the primitive world* の意味が、この作品の中にもっとも明確にとらえられていると思えることである。いま作品の検討に入る前に、この小論の目標をもう少しはっきりさせる意味で、D. H. Lawrence が *Studies in Classic American Literature* (1923) の序文で触れた Anderson 寸評をめぐって考えてみる⁴⁾。

問題は Anderson とアメリカ文学の伝統との関係についてである。いいかえれば、それは Anderson の中におけるアメリカニズムについての問題といってもいい。すでに何年も前に Horace Gregory が指摘しているような、Anderson の中にあるアメリカの特徴については、従来いろいろ

な批評家によって言及されてきたことは事実である⁵⁾。しかし、その内容が検討されたことの少なかつたのも事実である。Lawrence の Anderson についての寸評は、Anderson の作品の中にあるアメリカの特徴とは何なのか、という問題を考えていくのに、非常に有効な検討の糸口を与えてくれる。

Anderson 自身はいつもアメリカ文化と文学の伝統を求め、あるいはその特質を問い続け、自分の作品がどう関わるかという問題を意識し続けていたといっている。その問題とからんで Van Wyck Brooks や Waldo Frank など、いわゆる *The Seven Arts* の批評家たちから彼が受けた影響の功罪という問題も、いまだ十分に検討されつくされていない⁶⁾。いまそういう問題はおくとして、問題を Lawrence の発言にもどすが、彼は例の序文の中で、“...by American I do not mean Sherwood Anderson, who is so Russian.” とひとことで片づけてしまっている。そして彼がアメリカ的とする作家として、Hawthorne, Poe, Dana, Melville, Whitman をあげる。Lawrence はこれらのアメリカ作家たちを Tolstoi, Dostoevsky, Chekhov などと対置させ、双方を現代文学の両極と規定して、つぎのようにその特徴を説明する。

The great difference between the extreme Russians and the extreme Americans lies in the fact that the Russians are explicit and hate eloquence and symbols, seeing in these only subterfuge, whereas the Americans refuse everything explicit and always put up a sort of double meaning. They revel in subterfuge. They prefer their truth safely swaddled in an ark of bulrushes, and deposited among the reeds until some friendly Egyptian princess comes to rescue the babe.⁷⁾

ここで、Lawrence はロシア文学の特徴として、明白性を好む傾向、能弁や表象をごまかしとしてきらう傾向をあげている。一方アメリカ文学の特徴としては、明白さをきらひ、意味の二重性を用いる点を強調している。Lawrence はこのように一見したところ表現技法の問題として「ロシア的」と「アメリカ的」とに現代文学を分類したうえで Anderson をアメリカ文学から排除している。しかし、実際に Lawrence が論じているのは、表現技法の問題ではなくて、まさにアメリカ文学の主題についてであり、認識上の問題なのである。

Lawrence はアメリカ作家の認識上の特性は、その二重性にあるという。ひとつは本能 (instinct) とか直感 (intuition) による認識である。もうひとつは知識 (knowledge) あるいは知性 (understanding) と呼ばれる認識作用だと彼はいう。このような分裂は人間の行為そのものと、それを眺める意識作用とが人間の内部で分離したときに始ったのだと彼はいう。またそれが人間の罪 (sin) の始まりであったという。そしてこの分裂と双方の間の葛藤こそが、アダムとイブ以来ずっと人間が背負い続けてきた十字架だという。Lawrence はアメリカのすぐれた作家・詩人たちの作品の中に、この分裂がどう現われているかを明快に論証していく。例えば *The Scarlet Letter* の中に彼は Hawthorne 自身の知性あるいは理性から発せられる声と、作品そのものが発する声とをききわける。この二つの声をききわけ、作品そのものが語る真実を、作家の知性の声、すなわち偽りの声から救い出すことこそが批評家の本来の任務だという⁸⁾。Lawrence は、またこの考えに立って Whitman の詩を論じてみせる。彼は Whitman の特徴は自己と自己の外に在るすべてのものとの一体化を目指した認識作用だという。しかし Whitman が認識対象との完全な一体化、認識対象への没入を目指したとき、Lawrence はそこに魂 (soul) がその完全性 (integrity) を失う危険を読みとる。また Whitman が他者との本来あるべき関係を共感 (sympathy) の中に見出したとき、そ

れは「～とともに感じる」(feel with) ということのはずだと彼はいう。そして Whitman は人間対人間の関係をこのような sympathy の意味でとらえたとき、偉大にして新しい生活の教理、つまりすばらしく新しい倫理を提唱していたのだ、と Lawrence は Whitman を賞賛する。しかし、その後 Whitman は過ちを犯したという。その過ちが生まれたのは Whitman が、この sympathy の意味を、キリストの「愛」と混同したためだと Lawrence は厳しく批判する。彼は「～とともに感じる」ことと、キリストの「愛」のように「同情する」(feel for) こととを峻別する。そして「同情」とは自分の魂を他者の魂の中に没入させてしまうことと同じ意味だと述べ、その認識の行きつくところは死だ、と Lawrence は断じる⁹⁾。

このように Lawrence の説にこだわるのは、彼が上述のように論じてみせてくれたアメリカ文学の特徴を、Anderson の作品や発言の中にも、その特徴として指摘できるからである。たとえば、すでに述べたように、Anderson はアメリカ文化の活力を自然の中にひそむ生命力に求めた。彼はそれを、あるときは animalism と呼び、またあるときは instinct, intuition, impulse, あるいは the primitive world というようなことばで表現した。彼がそれと同質のものを Whitman の中に見出したのは、初めて *Leaves of Grass* を読んだ 1890 年代の中頃、彼が 20 歳前後のときであった。その後の作家生活を通じて、彼の Whitman に対する関心は同情と反発との間をゆれながら、結局は共感を強めていった¹⁰⁾。彼が創作の動機を語るときには、つねに自分の内部から湧き起こる衝動のような力について言及する。そのことを彼の作品、書簡、回想などで知ることは容易であるが、いまここに一例としてあげるのは、1917 年 9 月に彼が Waldo Frank に宛てた手紙の一節である。これは彼が作家生活を志してシカゴに出る直前、後に出版されることになる *Marching Men* (1917) を書いていた頃、つまり 1910 年前後の創作意欲について述べたものである。現実生活では意にそまない実業にたずさわる一方、創作の衝動にかられていた苦しい時期の心境でもあり、小説のテーマでもあった。文中の “the big adjustment in my own life” ということばは、その間の事情でもある。

As for *Marching Men*, well, you will never know with what interest I have waited for your reaction to the book. As I told you one day, I wrote it in the midst of the big readjustment in my own life. It was a theme that appealed strongly to my rather primitive nature. The beat and rhythm of the thing would come and go; a thousand out-side things would flow in. I worked madly; then I threw the book away. Again and again I came back to it. In the end I had no idea as to whether it was good or bad. I only knew that the thing was out of me and I could turn to something else.¹¹⁾

ここには Whitman だけでなく、自然界のリズムに耳を傾けている Thoreau をも連想させる経験が述べられている。Anderson が創作活動や生活の源泉と見なしたこのような感覚が、Emerson, Whitman, Thoreau, Melville, Twain といったアメリカ文学の根源的な感覚と同質的なものである点を重視して、その観点からの批評を試みたのは Horace Gregory である¹²⁾。しかし、その方向の研究は必ずしも十分とはいえないようである。その観点からの研究として、やはり必要なのは具体的に作品をとりあげて検討することであろう。

さらにいえば、Anderson の作品には、Lawrence の寸評とはうらはらに、多くの symbolism が用いられている点も注意すべきである。たとえば *Winesburg, Ohio* (1919) の表題が響かせる意味をはじめとして、この作品の中に埋めこまれているいくつもの表象は、聖書との関連で読みとらな

なければならないものが多い。木、草、手の象徴性、“Godliness”や“Strength of God”の寓意性や象徴性を検討することは新たな作品評価を予想させる¹³⁾。

もうひとつ、Lawrence が指摘した本能と知識との葛藤についても、それは Anderson にとってもつねに大きな問題であった。彼の作品に一貫して描かれる性^{sex}についての描写には、その問題がつきまとっている。また *Winesburg, Ohio* 中の“Loneliness”は、小品ではあるが、Lawrence がいう意味での本能と知識との分裂と葛藤にさいなまれる、平凡な男の哀れな物語といえよう。またあとでも触れるが、同じ作品の中の“Sophistication”の主人公 George と、恋人 Helen White が愛情を感じ合うのは、若々しい動物的な生命感(“animalism”)が湧きあがってきたときであった、と描かれている。この二人の愛情の意味は、やがて *Many Marriages* (1923) と *Dark Laughter* (1925) における、赤裸々な性の賛歌というテーマに発展する。

従来の Anderson 論においては、たとえば Lawrence が Anderson を「ロシア的」と決めつけた流儀の評価が非常に多い。彼と Whitman との関係や、Horace Gregory がいう意味でのアメリカ文学の伝統との関わりについても、そういった流儀の評価が多かった¹⁴⁾。この小論では、Anderson における「アメリカ的」要素としての彼の自然観に深く関わる問題として、彼が animalism とか the primitive nature というとき、それが指す意味を“Death in the Woods”の中で探してみたい。それはアメリカ文学の伝統を見渡す眺望の中で、彼が占める位置をより明らかにするための討論に貢献し得るひとつの視点を与えてくれると思われるからである¹⁵⁾。

II

短篇“Death in the Woods”は Anderson の四番目の物語集 *Death in the Woods and Other Stories* (1933)¹⁶⁾ の中に収められて、これがこの作品のいわば決定版となった。前にも述べたが、この作品が完成するまでには十年以上の歳月をかけていると Anderson は一度ならず語っている。

この短篇が最初に出版されたのは *Tar: A Middle West Childhood* (1926)¹⁷⁾ の Chapter XII としてであった。その直後に、それにかなり手を加えたものを *The American Mercury* の 9 月号に掲載した。これは *Death in the Woods* に収められている決定版とほとんど同じものだが、それでも読みくらべて見ると、語句のさしかえやコンマ、ハイフンなどの変更など約五十箇所に入っているほか、最初のセクションの末尾には、四行にわたるパラグラフが挿入されている。Anderson がこの作品に対して、なみなみならぬ関心をもち続けていたことがうかがえる。現在はこのほかに二つの草稿が公にされている。ひとつは 1969 年に William Vaughn Miller がイリノイ大学に提出した博士論文の中に含まれている“Death in the Forest”と題する自筆原稿の転写である¹⁸⁾。もうひとつは、Michael Fanning が、やはり自筆原稿から転写したもので、*France and Sherwood Anderson: Paris Notebook, 1921* (1967) の中に収められている¹⁹⁾。このうち前者は 1920 年から 21 年の間のいつごろ書かれたものであるか確定できない。後者は 1921 年に Anderson が初めてヨーロッパを訪れ、パリに滞在している間に書いたものである。前者の“Death in the Forest”の自筆原稿には、Anderson 夫人の手で“Early version of short story Death in the Woods”と注がついているとのことである²⁰⁾。*France and Sherwood Anderson* に含まれている草稿については、Fanning が、これは最も初期の草稿であろうと注をつけている。しかしその前後はいまのところ決定しかねるようである。いずれにしても、この作品の完成には十年以上の歳月がかかっているという作者の発言には誇張はなさそうである。それだけの歳月をかけて完成しただけに、Anderson はこの作品に対しては、かなりの自信をもっていたことはよく知られている²¹⁾。では、それだけの年月をかけて彫琢を加えて彼が追求したものは何であったのか。

それに関しては、彼が *Memoirs* の中で、この作品の原体験として語っているある冬の夜の経験をとりあげてみる必要がある。それは 1920 年頃、彼が執筆のためにシカゴ郊外にある Palos Park に借家をしていた頃の経験である²²⁾。

その冬の夜、彼は犬を連れて散歩に出て森に入る。いっしょに来た犬に他の犬も加わって、二十四ほどにもなっている。空には月が出ている。木が切り払われた場所に出る。切られて倒れかかっている木の幹に登り、その上に身を横たえる。彼はそのとき、自然の中で突然原初の世界に連れこまれたような不思議な感じを経験する。そして、その中で犬についての不思議な経験について語っている。

The little clusters of snow crystals in falling thus softly touched my upturned face. It was as though soft cold fingers were caressing me. I lay very still, something of the mystery of the night, the white world and the frost having come into me. How long I lay there that night I'll never know. I was warmly clad. It is possible that I slept and dreamed although I do not think so.

The dogs had become silent and then suddenly there was one of them, a large German police dog with his bare leg on my chest. He was standing, his hind legs on my legs, his forelegs on my chest and his face close to my face. In the moonlight I could look directly into his eyes.

I thought there was a strange light in his eyes.

Was I frightened?

Well, I can't remember. The dog stayed there, his eyes staring thus into my eyes for two or three minutes, and then he turned and ran down the log.

I turned to look and there the dogs were. They were running in a circle in the open place in the forest. There may have been twelve, fifteen, even twenty of them. Each dog ran with his head at the tail of the dog before him. They ran in silence. They had made a path in the snow in the forest. At least I did not dream that. I went on the next day and saw the circular path they had made in the snow.

They kept running, thus, silently in their circle, and I lay still on the log. There was this strange feeling of having been transported suddenly to a primitive world.

In the forest on the winter night dogs kept leaving the mysterious circle in which they ran and coming to me. Other dogs ran up the log to put their forelegs on my chest and stare into my face. It seemed to me, that night, that they were caught by something. They had become a wolf pack but there I was, that night that the dogs, in breaking thus out of the running circle to come to me, one after another, wanting to be reassured.

That there was such a thing as man, that they were the servants of man, that they were really dogs not wolves in a primitive world. That night I stood the strange performance as long as I could and then I arose and ran down the log. I shouted. I had picked up a stick and ran among the dogs, hitting out at them. The running circle was broken and, as I walked home along a woodland path, the dogs again played about me. They got up a rabbit and with a glad outcry gave chase. They were village dogs again.²³⁾

ここに引用した描写の中にあるほとんどの素材は、そのまま“Death in the Woods”の類似した場面の中に生かされている。引用部分の中で、それらがどのように用いられているかを整理してみよう。(1) 空、月、森、雪などは、自然そのものとして存在している。(2) 雪の感触は、冷いと同時に愛撫する指として感じられる。Cold と soft, caressing は雪の与える感覚の相反する二面性を暗示する。それはおそらく自然に内在する陰悪な面とやさしい面、死と生とを暗示する。(3) 犬の位相は人間の世界と、狼が象徴している獣性の支配する世界との間を行きつもどりつしている。(4) 犬の目の光と円形運動——犬の目の不思議な光は、突然原初の世界にひき入れられた感じをAndersonに与える。おそらく円形運動は獣性のもつ単調な反復性と拘束性を暗示する。単調な動きの円形パターンは、獣性が人間を呪縛しようとする儀式と感じられる。(5) 引用文の最後のパラグラフでは、獣性の呪縛を断ち切る行為が描かれている。彼は立ちあがって大声をあげ、棒きれを持って犬をたたき散らして円形運動をくずす。Andersonはここで獣性に対しての抵抗と拒否を示している。

Andersonは一般に他の作品では、自然、本能、獣性などのことばによって人間の内部にひそんでいる活力を表現する場合が多く、それらのもつ活力を強調して描いている。*Windy McPherson's Son* (1916) や *Poor White* (1920) の中では、主人公のMcPhersonやMcVeyが性欲に対して疑問を抱き、それをさけようとすることもあるが、結局はそれをおおらかに受け入れていく方向を示している。それはやがて *Many Marriages* や *Dark Laughter* の主題に発展する。*Poor White* のMcVeyも *Many Marriages* のJohnも掌の上で自然のhealing powerを象徴する小石の光の中に、本当に生きることの意味を見出していく。*The Triumph of the Egg* (1921) の「卵」の中には、さかしらな人間の理解を越えた怪奇な力が凝縮している²⁴⁾。そして人間の浅知恵をあざ笑うような描写を通して、そこに強調されているのは、上述のような陰悪さとはまた別の、自然に内在する、測り知れない、無気味な力である。“Death in the Woods”の原形となったPalos Parkの経験には、すでに自然界にひそむ陰悪な力が、かなり明確にとらえられていた点で、他の作品で見られる自然観照に比べて一段の深化が読みとれる。しかし、*Memoirs* の叙述の中には、獣性の呪縛を断ち切った力が何であるかは明確に説明されてはいない。

Andersonにとって、このように獣性を拒否する一種の力を明確にすることは、Palos Parkの経験を作品化して、それを完成させることに等しかったといえよう。“Death in the Woods”では、Palos Parkの自然のたたずまいなどすべての素材はほとんどそのまま生かされているが、作品全体の背景は彼が少年時代を過ごしたClydeの町と思われる。この作品の最初の草稿と一般に考えられている“Death in the Forest”は、語り手の少年時代の町の背景的描写のスケッチで終わっている。それに対し、Michael Fanningが転写した“Paris Notebook”の中に入っているスケッチには、“Death in the Woods”のMrs Grimesの原形がスケッチ風に描かれている。町の背景全体のスケッチとMrs. Grimes像のスケッチとを融合して作品に統一しようとした創作過程の一端がうかがえる。そして両者の融合した形になった作品は最初に*Tar*の中に収められ、*The American Mercury* 紙にほぼ完成に近い形で掲載され、さらに手を加えられて1933年に*Death in the Woods*の中に決定版として収められる経過は、すでに述べたとうりである。その過程で、Andersonがもっとも苦心したのは、さきにも述べたように、獣性の呪縛を断ち切る力を形象化することであったといえよう。それは具体的にはMrs. Grimes像を描き切ることであったし、彼女の死の瞬間に集約される彼女の人生総体の意味を提示することであった。それはまた作家としての力量を計る尺度でもあった²⁵⁾。彼はこの短篇の終曲部で、その経過と彼の創作方法と、この作品の主題の意味を簡潔に詩的に表現している。そして末尾の“something”の意味は十分に成熟していて、以

下に描かれる Mrs. Grimes の一生が象徴している意味全体を包みこんでいる。

The whole thing, the story of the old woman's death, was to me as I grew older like music heard from far off. The notes had to be picked up slowly one at a time. Something had to be understood.

この物語の語り手が、長いあいだ問い続けてきたものは、彼が少年時代に見た森の中の老女の死体の不思議な美しさであった。背中につけた袋の肉は食べつくされ、衣服はひき裂かれていたが、その死体には雪が付着し、こごえて固くなっていて、少女の大理石像を思わせる美しさであったと語り手はいう。Anderson は語り手の声を通して、その女性像に彫琢を加える。それはもっばら、Palos Park で犬の円形運動が象徴する獣性の呪縛の輪を断ち切った 不思議な力の意味を明確に描き出すことであった。そして、それはつぎのように描かれる。

The woman who died was one destined to feed animal life. Anyway, that is all she ever did. She was feeding animal life before she was born, as a child, as a young woman working on the farm of the German, after she married, when she grew old, and when she died. She fed animal life in cows, in chickens, in pigs, in horses, in dogs, in men. Her daughter had died in childhood and with her one son she had no articulate relations. On the night when she died she was hurrying homeward, bearing on her body food for animal life.

She died in the clearing in the woods and even after her death continued feeding animal life.

You see, it is likely that when my brother told the story that night when we got home and my mother and sister sat listening I did not think of the point. He was too young and so was I. A thing so complete has its own beauty.

I shall not try to emphasize the point. I am only explaining why I was dissatisfied then and have been ever since. I speak of that only that you may understand why I have been impelled to try to tell the simple story over again.

ここで描かれているのは、動物の生命を養い育てる (feed) 女性の本性の一貫性である。Mrs. Grimes は父親も定かでない生まれであり、年季奉公をしている家の主人に犯されそうになり、無知で粗暴な男と結婚し、娘を亡くし、夫とそれに劣らず無知粗暴な息子にひどい扱いを受けても、ひたすら人間と動物の生命を養い育ててきた。無意志的な女性であるが、彼女が本質としてもっている一貫して養い育てる営みと、それによって育てられた生命が生から死、死から生へと連続することを語り手は述べている。Mrs. Grimes の森の中の死は、確かにひとつの死であるが、同時に彼女の feeding という、いわば再生を可能にする一貫した本性は循環し、連続していくことを語り手は述べていると思われる。引用文中の "Something so complete has its own beauty." という命題的な一文は、その一貫性を指して述べているともいえよう。そしてこの一文は、語り手が少年時代に目撃したあの死体の美しさに、意味を与えたことにもなるだろう。それがまた、犬を寄せつけなかったあの女の死体の、神秘的な美しさの意味であったともいえよう。語り手の、そして Anderson の "something" の意味の探求はひとめぐりしたことになる。すなわち、彼は自然の中にひそむ二面性を注視した。自然の中にある一貫して循環連続する生命そのものを示す一面と、それを汚すか、麻痺させるか、死にひき入れる一面とである。"Death in the Woods" の中で、Anderson は

前者を Mrs. Grimes の一貫した feeding という営みの中に見た。そして後者の本質を犬と家畜と男たちの欲情の中に見た。*The Oxford Anthology of American Literature* の編集者にあてて 1937 年に Anderson が書き送ったといわれる文章の中で、彼は次のように書いている。これは上述のような解釈と一致すると思われる。

It seems to me that the theme of the story is the persistent animal hunger of man. There are these women who spend their whole lives, rather dumbly, feeding this hunger. For years I wanted to write this story.²⁶⁾

III

“Death in the Woods” 論には、すでにいくつものすぐれたものがある。その中で、直接ではないが、この小論で扱ってきた問題、すなわち原初本能をめぐる問題にかかわるすぐれた論文のひとつは、Sister Mary Joselyn, O.S.B. が *Studies in Short Fiction* の 4 号 (1967 年春) に発表した “Some Artistic Dimensions of Sherwood Anderson’s ‘Death in the Woods’” である²⁷⁾。これは、この短篇についてのすでに出たいくつもの論文の成果を生かして発展させていて、多くの刺激を与えてくれるよい論文である。前の項で論じた内容を、さらに補足するために、その論旨をめぐって問題点を指摘しておきたい。

まず論者は、もうひとつの多くの示唆に富む Horace Gregory の見解のうち、特に「この作品の外観上の形式は明らかに物語であるが、内容構成は詩の形式をしている」という主張に賛同する²⁸⁾。そのうえで論者は、自分の論文の目標について、それはこの物語に見られるすぐれて統一された形式を明確に示すことよりも、物語の中に現われる「変転」(‘transformation’) に焦点を合わせて検討することだという。論者はその「変転」を四つの相に分類する。まず第一に Mrs. Grimes の変転である。彼女は年季奉公人の状態から、ついで黙々と奴婢のごとく働き、ひたすら無知無頼の夫と息子と家畜に食べ物を与え続ける女となり、さらに最後には大理石の像のように白くこごえて死に、永遠の少女を象徴するような姿となる。第二の変転は、この物語の中心的存在としての語り手の意識の変転である。この第二の変転については、論者は、もうひとつの示唆に富む Jon S. Lawry の論文をとりあげ、Anderson はこの短篇の中で芸術家としての自己発見を描いているという Lawry の主張にはほぼ賛同する²⁹⁾。しかし論者は、語り手の自己発見は、この物語で完結しているのではなく、将来おおきな意味のある変転をし続けていくことが示されている点を強調して、いわば語り手の芸術家としての完成を静的にとらえた Lawry の論を批判する。第三番目の変転は、やはり完結しない変転である。すなわち七匹の犬が狼に変わろうとした状態がそれだという。そして、この変転については、「この変転は物語の筋 (plot) との関連では小さな意味しかもたないが、主題との関連ではそうはいえない」と注釈をつけている。第四の変転は、以上三つの事実が芸術作品に変容していくという変転だと論者は述べている。このように Sister Mary Joselyn は四つの変転の相を示し、それらが互いに複雑に関連し合ってこの作品をひとつの統一体になっていると結論する。

しかし、ここでこの論文について問題としたいのは、七匹の犬の変転についてである。この犬の変転の中に見える「原初本能」(‘the primitive instinct’) が語り手にとって、ひいては Anderson にとって、どういう意味でとらえられるか、という問題である。その問題点について、論者はつぎのようにいう。

The circling of the dogs, thinks the narrator, may have been a kind of death ceremony, for the primitive instinct of the wolf aroused in the animals by the night and the running may have made them "somehow afraid". Perhaps they said to themselves: "Now we are no longer wolves. We are dogs, the servants of man. Keep alive, man! When man dies we become wolves again."

Although the animals act like wolves and have "lost" man in death, the narrator refuses to acknowledge their regression. This metamorphosis, then, remains incomplete, at least to the narrator.

論者も述べているように、語り手は人間から狼へ、つまり人間の世界から獣性の世界へ、さらには生から死への「退行」('regression')を拒否したのである。ここでさらに問題とすべきは、なぜこの変転が完結しないかということである。また、なぜ「少くとも語り手にとっては」その変転が完結しないかという点も重要である。先ほど論者は「犬の変転」は物語の筋('plot')との関連では小さな意味しかもたないが、主題との関連ではそうはいえないと述べたが、それ以後の論述の中では、この変転がなぜ「少くとも語り手にとって完結していない」のかという問題は論究されていない。

私は前項Ⅱの中で、むしろその問題こそ、この作品にとって最も中心的な問題と考えて考察してみたのである。

"Death in the Woods"の中に見られる Anderson の自然観が、彼の他の作品に見られる自然観と、どう関連するかということについては、前項で若干触れたに過ぎないが、その問題については別に詳しく検討したい³⁰⁾。また、この論考で見てきた彼の自然観が、1920年代後半から晩年にかけての彼の生活や執筆活動と、どのように関わっているかを検討することも必要だと思われる。そういう面の検討と同時に、彼の自然観と Whitman, Thoreau, Emerson などのそれとの関係を考察する方向に沿って、Anderson と *The Seven Arts* とのかかわりを通して、Anderson の中にある Americanism をていねいに検討することも必要であろう。例えばこの問題に関しては、彼の長編小説としては唯一の傑作 *Poor White* に見られる歴史感覚はどうして生まれたか、あるいはどうして発揮できたかという点などについては、彼のシカゴ生活の文化的背景を、きめこまかく検討する必要がある³¹⁾。

これまでの考察の中で、Anderson とアメリカ文学の伝統との関係について、Horace Gregory の見解に言及したが、彼は "Death in the Woods" の評価の中で、Anderson の神秘的な認識方法に注目し、そこに Emerson および Thoreau との親近性を見ている。また Gregory は "Death in the Woods" の imagery の中に Shelley の詩 "Queen Mab" の影響ありと推論している³²⁾。深い読みと鋭い感覚で、このような推論を試みることは価値がある。大切なことは、その次にくる実証であろう。

Bernard Rosenthal は彼の近著 *City of Nature: Journey to Nature in the Age of American Romanticism* の序文で、アメリカ・ロマン主義時代の文人たち Emerson, Thoreau, Whitman それに James Fenimore Cooper たちの自然についての理念を明快に論じている³³⁾。著者は十九世紀のアメリカの自然についての理念には二種の大きな流れを見ている。ひとつは、自然がその最も純化した形、すなわち文明に変転していく過程に自然の姿を見る。その自然観をもっていた代表的人物として、著者は Cooper をあげる。もうひとつの自然観は、上述のような自然はむしろ

“unnatural”であるという考え方である。その自然観は自然を精神、宗教の場と見なす。例えば Emerson, Thoreau, Whitman は、そのような自然観をもち、Cooper のような自然観から逃れて、自分の心の中に、自分自身の自然を打ちたてようとした、と著者は論じる。彼等は、歴史的・外的自然のかなたに、自己をもういちど実現し直そうとした、と筆者はいう。そういう彼らにとって、目の前の自然は必ずしも彼らの企てに対してやさしくばかりは映らなかった、と Rosenthal は述べて、Thoreau の “A Winter Walk” の一節をひいて次のようにいう。

On the other side of Walden Pond one might find “A Winter Wlak,” where Thoreau thinly covers with snow the death and decay he implicitly defines as something other than nature:

The wonderful purity of nature at this season is a most pleasing fact. Every decayed stump and moss-grown stone and rail, and the dead leaves of autumn, are concealed by a clean napkin of snow.

This world of death and decay lurked just underneath the “clean napkin” of nature. When the “napkin” was probed, however, when the world was explored, it often appeared in its ambiguity of whiteness.

雪の imagery、生と死の対比、という点から見れば、Thoreau の自然観の Anderson への影響という推論も、Gregory のいう Shelley の影響に関する推論と同等の価値で論じられるだろう。Anderson は Van Wyck Brooks をはじめとする *The Seven Arts* の同人たちの影響から、Whitman に対してはもちろんのこと強い関心をもっていたし、Thoreau についても関心があったことは考えられる³⁴⁾。“Death in the Woods” の imagery についての実証も、具体的事実の実証のほかに、文化の伝統を眺望に収めながら比較検討することは有効な作業であろう。例えば “Death in the Woods” 中の雪、生と死、自然のやさしい面と陰しい面との対比などの点についても、文化と伝統を背後にすえて、Shelley か Thoreau かを考えることが大切だと思われる。

註

- 1) 拙稿 “Sherwood Anderson's View of Walt Whitman”, (『大妻女子大学文学部紀要』第12号, 1980年3月)
- 2) Cf. Ray Lewis White (ed.), *Sherwood Anderson's Memorials: A Critical Edition* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1969) pp. 424-26; Martha Mulroy Curry, *The “Writer's Book” by Sherwood Anderson* (Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, 1979).
- 3) Cf. Martha Mulroy Curry, *op. cit.*, pp. 149-50.
- 4) 1923年に Thomas Seltzer より初版が出た。ここでは1977年の Penguin Books のリプリント版を用いた。
- 5) Horace Gregory, “Editor's Introduction: A Historical Interpretation, The Chronology of Sherwood Anderson's Life and Books,” *The Portable Sherwood Anderson* (The Viking Press, 1949). ここでは Penguin Books の1977年版を用いた。
- 6) 例えば, Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (Stanford University Press, 1951, 1961, 1968 再版) では V.W. Brooks の影響については、かなり批判的である。
- 7) D.H. Lawrence, *op. cit.*, “Foreword”.
- 8) *Ibid.*, pp. 89-107.
- 9) *Ibid.*, pp. 171-87.
- 10) Ray Lewis White, *op. cit.*, p. 343. 拙稿 “Sherwood Anderson's View of Walt Whitman”, (『大妻女子大学文学部紀要』, 1980年3月, pp. 16-17).

- 11) Howard Munford Jones and Walter B. Rideout (eds.), *Letters of Sherwood Anderson* (New York: Kraus Reprint, 1969), p. 16.
- 12) Horace Gregory, *op. cit.*
- 13) 例えば John J. McAleer, "Christ Symbolism in *Winesburg, Ohio*", Ray Lewis White (ed.), *The Merrill Studies in Winesburg, Ohio* (Charles E. Merrill, 1971) は、その面でのすぐれた論考。
- 14) 例えば Anderson と Whitman との関係について言及した批評は、1916 年 11 月に出た *The Seven Arts* 初刊号の Waldo Frank, "Emerging Greatness" をはじめとして非常に多い。Cf. Ray Lewis White, *Sherwood Anderson: A Reference Guide* (Boston: G.K. Hall, 1977).
- 15) Norman Holmes Pearson, "Anderson and the New Humanism," *The Newberry Library Bulletin*, December 1948 は、この方向の研究に多くの示唆を与えてくれる。
- 16) New York: Liveright より出版。
- 17) New York: Boni & Liveright より出版。
- 18) 注 3 参照。
- 19) Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1976. pp. 62-65.
- 20) 注 3 参照。
- 21) 注 3 参照。
- 22) この間の事情については、主につぎの三著を参考にした。James Schevill, *Sherwood Anderson: His Life and Work* (University of Denver, Denver, Colorado: University of Denver Press, 1951). William A. Sutton; *The Road to Winesburg: A Mosaic of the Imaginative Life of Sherwood Anderson* (Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, 1972). Martha Mulroy Curry, *op. cit.*
- 23) Ray Lewis White, *Memoirs*, *op. cit.*, pp. 425-26.
- 24) New York: B.W. Huebsch より出版。
- 25) 注 3 参照。
- 26) Cf. Horace Gregory, *op. cit.*, pp. 26-27. この原稿と思われるものは、The Newberry Library の Sherwood Anderson Collection 中のファイル "Death in the Woods — Foreword" に入っている。ここに引用した以外の箇所では、Gregory の引用とは若干の違いがある。
- 27) Newberry, South Carolina: Newberry College. pp. 152-59.
- 28) Horace Gregory, *op. cit.*
- 29) Jon S. Lawry, "Death in the Woods" and the Artist's Self in Sherwood Anderson," *PMLA*, LXXIV, 1959.
- 30) [※]性の問題については、拙稿 "Sherwood Anderson: *Dark Laughter* 論 (東京教育大学文学部紀要 西洋文学。1976 年 3 月), pp. 31-58 でも論及した。
- 31) Cf. Horace Gregory, *op. cit.*, p. 18. またもうひとつの参考としては、"...nobody has better depicted this way of living in which most of our Presidents from Lincoln to Coolidge were raised, and the impact on it of big industry, than Sherwood Anderson in his *Poor White*." — Samuel Eliot Morison, *The Oxford History of the American People, Vol. III, 1869-1963*. (New American Library, Times Mirror, New York and Scarborough, Ontario: The New English Library). pp. 71-72.
- 32) Horace Gregory, *op. cit.*, pp. 27-28.
- 33) Newark: University of Delaware Press. pp. 15-27.
- 34) *The Seven Arts* においては、Whitman や Thoreau は同人たちの精神基盤になっていたといえる。このことについては Claire Sacks, "The Seven Arts Critics: A Study of Cultural Nationalism in America 1910-1930" (A Thesis for Degree of Doctor of Philosophy at the University of Wisconsin, 1955) が参考になる。また、Ripshin Farm にある Anderson の蔵書中には、*Walden* の Dutton, 1912 年版と、*A Week on the Concord and Merrimac Rivers* (New York: Scribner's, 1921) がある。Cf. 'A Catalog of Sherwood Anderson's Library,' Compiled by Charles E. Modlin & Herbert H. Campbell, *Sherwood Anderson: Centennial Studies* edited by H. H. Campbell & C.C. Modlin (New York: Whitston Publishing Co. 1976). なお、編者も序文でいうように、蔵書に含まれているからといって、必ずしも Anderson がそれを読んだとはいえないが、発行年から見ても、読んでいた可能性も強い。

* "Death in the Woods" のテキストは、Liveright, 1933 年版を用いた。